



III-1

世の中で一般的に言われている善悪は、観念であって正しくない。これは輪廻転生、魂の落下と上昇のプロセスを知らない無知な人間達が作り上げた観念である。よって観念を捨断するぞ。観念にとらわれずに、魂の向上のために、利益になることを実践するぞ。これまで培ってきた価値観に反しても、本当に魂の向上に役立つことを迷わず実践するぞ。ヒナーヤナやマハーヤナの見解を乗り越えたヴァジラヤナの見解に立つぞ。この世の中を法則の世界にするために、悪趣を高い世界へポワするぞ。今の世の中は、三悪趣のデータに落ちている。私の多くの縁深き人々が、この汚れた世の中に存在しているのだ。このままでは、縁のある全ての魂が三悪趣に落ちてしまう。彼らは地獄の苦しみを知らない。身体が疲労し、刺され、焼かれ、つつかれ、ただれ。何度も何度も身体が崩れ落ちる苦しみを知らない。その世界へは、どんなことがあっても行かせないぞ。動物の世界は、強いものを恐怖しながら絶えず食べ物を探し求めなければならない。そして、弱いものを殺生することによって、一度落ちた動物界からなかなか抜け出すことはできない。このような世界に、縁深き魂を行かせないぞ。たえず食物、物質、異性を追い求め、得られたとしても、そのものが苦しみの原因となり、また新しいものを追い求め、苦しみを続けなければならない。その低級霊城の世界へ縁深き魂を落とさないぞ。縁深き魂を三悪趣から救済するぞ。私と縁のある魂を救済するのは、私しかできない。そして、それが今生の私の使命である。その人達を救済するには、真理の法則によって降伏しなければならない。彼らを救う方法は、真理を実践させる以外にはないのだ。したがって、徹底的に導くぞ。縁ある人々の現世的な観念とはいっさい妥協せず、真の哀れみを持って縁ある衆生を救済するぞ。周りの人に自分がどう思われても気にしないぞ。なぜならば、私の周りの人は迷妄によって真実を見失っているからである。一日も早く、1人でも多くの人を真理に導き入れるため、全力でがんばるぞ。それによって、いかなる苦しみがあったとしてもそれは自己の悪業を落とすプロセスである。したがって、私は忍辱の修行を喜ぶぞ。ハードなカルマ落としを喜ぶぞ。なぜなら、私は自分自身で、自分のカルマを落とすことができないからである。いくら功徳を積んだとしても、私の悪業は落ちない。したがって、周りから落とされるハードなカルマ落としを喜ぶぞ。

III-2

たとえ恨まれようと、憎まれようと、どんなことをしても、真理に結び付け、救済することが真の慈愛である。真の慈愛を持って、厳しく衆生を救済するぞ。たとえ導きによって、かつて親しかった人が真理を理解せず離れていったとしても、その人の徳の無さ、無智を哀れみいつか救済するんだと言う心を持って、その他の縁深き魂を救済するぞ。私は救済者なんだ。現世の縁によって私が生きるとするならば、私は彼らに引きずられ私もまた悪趣に落ちてしまう。したがって、たとえ導きによって、かつて親しかった人が真理を理解せず離れていったとしても、悪縁が切れたことを喜ぶぞ。大切なのは迷妄の人々を真理に結び付けることであり、真理を実践させることであり、そのためには、いかなる手段でも用いて救済するぞ。救済を成し遂げるためには手段を選ばないぞ。救済を成し遂げるためには手段を選ばないぞ。救済を成し遂げるためには手段を選ばないぞ。そして、まわりの縁ある人々を高い世界へポワするぞ。まわりの縁ある人々を高い世界へポワするぞ。まわりの縁ある人々を高い世界へポワするぞ。

懐かしき資料

1994年

1994年

ノンフート (治療省・法皇官房)

年 月 日 \* イニシエーション開始前にお出してください

支部(部署) 担当の師(上司)

非信徒・信徒・マナノ

氏名 \*リーネム

生年月日 年 月 日 時 分 出生地 年齢 歳 性別 男女

現在の身長 cm 体重 kg 血液型 型

1. 今までにかかった病気に○をつけてください

心臓病	肝臓病	腎臓病	喘息	肺の病	消化器病
精神病	てんかん	眼の病	鼻・喉の病	手足の病	その他の病

★ ○印の病名

★ 現在も通院中ですか? はい いいえ

★ 現在、定期的に飲んでいる薬はありますか? はい いいえ

2. 薬や食べ物のアレルギーはありますか? はい いいえ

「はい」と答えた方は何に対するアレルギーですか?

3. 現在の体調はいかがですか?

良好 まあまあ良好 体がだるい 熱がある(体温 度) 睡眠不足 その他( )

4. アルコールは飲みますか?

飲む(種類 量 ml/日) 以前飲んでいた(種類 量 ml/日) 飲まない

5. タバコは吸いますか? 吸う(本/日) 吸わない 以前吸っていた

6. 薬物経験はありますか? ある(種類) ない

7. 現在妊娠中ですか? はい(妊娠 週) いいえ 不明

8. 最終月経は? 月 日から 日間 閉経

月経周期は? 日型 不規則

9. 今までに以下のイニシエーションは何回受けましたか?

キリスト(ヴァジラヤナ)のイニシエーション	回	月	日
バルドーの悟りのイニシエーション	回	月	日
中間状態のイニシエーション	回	月	日

10. 修行は好きですか? 好き 普通 嫌い 良くわからない

11. 教学の進行状況 ヴァジラヤナ教学 話まで 特別教学システム 入門・初級・中級・上級 課まで

12. 導師に対する信 ある 疑念がある ない

13. 中間状態イニシエーションについて意欲を感じていますか? はい いいえ よくわからない

14. 出家の意志はありますか?(在家の方に) かなりある いくらかある ないと答えた方、いつ頃予定していますか?

その後、みんなデニスに行くといい、荒木君も後から来るといったので話しの続きをしようかと思つたが、なんか会場の前の銀行の駐車場に公安のたかマスコミのたか知らないが隠しカメラをつんだワゴンがあるというので証拠写真を撮らなきゃならないとのこと。

僕は（ああ また、千代丸健二のところに話しを持ち込んで、人権侵害です、私達は被害者です！みたいなこというのかな？本当の被害者は事件の被害者だろ）と思いがながら待っていたら、それが長い長い。そしてキャビンをつかしてたら、広報部の女性サマナに「バンドのメンバーが衣装の帽子を忘れたのでデニスに届けて」というバクテイを頼まれる。さらに待ち続けると、ひめちゃんが友達を送りに駅方面まで歩いていき、また戻ってきたので、少し立ち話した後「荒木君を待ってるけど、遅くなりそうだし、忘れ物を届けてっていわれたていこうか？」ということになり、ひめちゃんと一緒にデニスへ。この時は（このままずっと一緒にいたいな）とか（援助交際してるオヤジと思われなかな？）と考えながら歩いてました。

ひめちゃんとは入信前のこと、入信後の修行のこと、これからのこととか、いろいろ話したけど、内容はプライベートにかかわるので、ひめちゃんも本さんのマネということでもデニスに到着したら、信徒、サマナでいっぱい！（いいのかな 僕がいて、昔だったらボアされてるぞ）と思いつつ、ちゃっかりとぐりんちゃん（定食を食つた）の隣をGET。

その後VERYちゃん、ぐりんちゃんとおしゃべりし、広報部の別の女性サマナに（もどつてこないの？）といわれたりしている間に時は過ぎる。荒木君も来たけど、ちよつと顔を見せただけで、すぐに帰ってしまったので、結局話しの続きはできずじまいだった 残念無念

ここでは西村さんに替わって、完全解脫のギタリストのケイマールくんにかメラマンをやらせる。ケイマールくん、君はいいやつだ、オウマールから信徒になったという不思議な青年だが、君のまだとまどいを残した目が好きだ、できれば君の好きな石井久子さんの法廷からの言葉に真剣に耳を傾けてほしい。メールアドレス教えてくれてありがとう。

その後、メンバーは反省会があるというので、また別の場所へ。僕も帰らなきゃいけない時間になったのでケイマールくん「また会おうね！」と言葉をかわし、帰路にく。 ( BUT ! その後、「あなたと話しても、得るものはない」と変化、会うのを拒絶される。いったい何が彼の身に起こったんだろう？ WHY ? )

冬の夜風を背中に浴びて、一人寂しく歩きながら

(94年、95年の教団の状況、あるいは、現在、公判で審理されている事件と今日のイベントとのギャップはすごいな、まあ公安が言うような、再び事件を起こすといふことはないと思うけど、どんな理不尽なことしても自分はそこで癒されたといふ教団に依存し、被害者の苦しみを見ないでいるのは、君たちが勉強会の前に唱える“苦の詞章”の考え、あるいは君たちが入信前に思い描いた“救済”とは掛け離れた、単なるミーイズム、エゴイズムだぞ。

僕もエラそうな事は言えない、内側にドロドロした欲望をかかえてるけど……もう一度、原点から振り返って見ないか？お互い)

なんて考えながら、TOKYOの夜の街に吸い込まれて行きました。

PEN NAME 沢木 晃

オマケ

このLIVEとは関係ないが、最近読んだ本でおもしろかったやつを紹介したい。

〈甘え〉の精神病理 中山 治 洋泉社 1996

中のオウム問題について書かれたものの一部

・「自由からの逃走」を求める若者たち

～略～オウム真理教の病理は教祖を支える人々の存在なしには考えられない。というより、むしろなぜ多くの若者が麻原彰晃のような人物にひかれ、火に誘われる虫のように自らマインドコントロールの餌食となつてしまったのか、その背景を探りたい。考えようによっては、教祖の性格よりもこちらのほうがよほど重大な問題である。オウム問題が語られる際、マインドコントロールの恐怖が常に強調されているが、私はそれよりも信者に見られる「自由からの逃走」を求める気分のほうがよほど問題であると思う。「自由からの逃走」という欲求があるからこそマインドコントロールにはまっついていくのであり、それがなければ入口のところまでマインドコントロールは避けられるのである。

では、自由とは何か。これは多様な価値観、さまざまな情報を主体的に選び取って行動に反映させることであると私は思っている。もちろん、自由には責任が伴う。その責任は自分が負わなければならない。では、人は完全な自由があるかといえば、これはないとしか答えられない。才能もないのにプロ野球選手や歌手になる自由があるといつても無意味であるし、価値観や情報の主体的選択とはいっても時代精神や社会風潮による誘導や束縛は大変強いものがある。自由とはあくまで限定的なものであり、それはこれから永久にそうであろう。

しかし比較相対的な視点にたつてみると、たとえば今の時代の若者と太平洋戦争下の若者とではその自由度に比較にならぬほど大きな違いがあるのもまた確かである。太平洋戦争下の若者は戦争に加わる以外の選択肢がほとんど許されていなかったのに対して、今日の若者は比較にならぬほど多様な選択肢が用意されており、さまざまな生き方が許容されているのである。

ところが、オウム真理教の若者はこうした生き方に背を向けて、わざわざ太平洋戦争下における若者のような不自由な生き方を選択してしまっている。すなわち、教祖を盲信し、大量の化学物質の存在といった事実を背を向け、外部からの情報はすべて米軍やフリーメーソンの謀略と決めつけ、不利な情報や事実を突きつけられるほどにそれらを打ち消すべく「予言の成就」やらハルマゲドンやらの妄想が肥大化する、というお決まりのパターンである。

しかし、このように述べると、それもまたひとつの選択であり、その人の自由ではないか、といった反論が出てくる。しかし、これは詭弁である。確かに、選択の自由はあつても、ひとつの生き方を選択してしまえば他の生き方は捨てることになる。しかし、だからといって、自分の生き方とは異なる価値観や別な角度からの情報によるフィードバック回路を遮断してよいということにはならない。そうしたフィードバック回路こそが自由を保障するからである。つまり、このフィードバック回路によって再び自分がまた別の新しい生き方を選択する余地が残されることになるのである。

ところが、オウム真理教の若者たちには自分たちとは異なる価値観、生き方、さまざまな角度からの情報をフィードバックする回路を持っていない。だから、彼らは自由ではないのである。まさに、自由から逃走したのである。それゆえ、彼らは教祖を盲信する以外に道はなくなっている。いわば退路が断たれているのである。

こうした「自由からの逃走」は直接的にはマインドコントロールによるものであるがそれに引きずり込まれていった彼らのほうにも問題はある。彼らは生真面目で純粋であるが、他方である種の固さ、頑なさを持っている。

以上



などといっています。しかし、そもそも誰が彼のことを阿羅漢だと確かめたのでしょうか。しかも、彼は阿羅漢のくせに、なぜ自分よりステータスが高い、仏陀である尊師に帰依しなかったのでしょうか。

よく考えると、オウムでは、「仏陀が法輪を回さないと阿羅漢はあらわれない」といっています。彼はなぜ尊師よりも前に阿羅漢になれたのでしょうか。彼が阿羅漢であるとする、尊師が仏陀といえなくなってしまう。逆にもし尊師が仏陀であるとする、彼は阿羅漢ではないこととなります。そうすると、彼の発言も、「阿羅漢だから絶対に正しいはずだ」などとはいえなくなります。

仮に彼が阿羅漢であって、尊師のことをいくら「すばらしいグルです」だとか、「あなたから光が見えた」などといったとしても、別に尊師のことを仏陀だと認めたわけではないことぐらい自明のことです。また、彼がその後、オウムが無差別殺人を犯したことを聞いて、「あの方がそんなことをするのはとても思えません」といったことや、一連の事件がオウムの仕業であることが確定的であることを考えると、彼の目が節穴だったことは(残念ながら)いうまでもありません。

さて以上の二人は尊師を褒めていた人物ですが、実は尊師に否定的な人たちもいました。一人目はケラニア大学のラーフラ僧です。これは二人の対談を見ればわかることですが、尊師とラーフラ僧との対話では、ラーフラ僧は最初から最後まで尊師に批判的でした。

また、これは注意して読まないといけないのですが、実はスリランカ国営テレビのインタビュアーの女性も、結構尊師に反抗的です。彼女の質問の中には、「あなたは弟子の方から仏陀といわれているようですが、どう思いますか」というものがあります。ようするに、裏を返せば、「あなたみたいな人が仏陀ですって！何をいっているんですか！！」という皮肉なのです。さすがに僧侶を見る目の厳しい、仏教国の人らしい発言です。ただ彼女は、仕事の上の話だということもあって、あまり表立っては尊師を批判してはいませんが、..

まあ、とりあえず、以上のことをまとめてみますと、

みんな尊師のことを褒めてはいても、なぜか尊師に帰依したためしはない。

尊師を仏陀と認めたのはカール・リンポチェ師だけが、仏陀の定義が疑問。

最終的に、生きている人はみな、自分の目は節穴だったと前言を撤回している。

これらのことがいえると思います。つまり彼らにいわせると、「尊師は一見すると素晴らしい方でしたが、よく考えたらそうではなかった」、ということです。よって、彼らの発言をもとに、尊師は偉大なグルだったなどというのは、不適切だと思います。

まあ、だいたい、尊師のように、他人の教えや称賛の言葉を求めるという行為が、彼が仏陀でないことのよい証拠であります。お釈迦さまが悟った後に、誰かに教えを請うたり、他人の称賛を求めたでしょうか。真に完全な悟りを得たら、「為すべきことは為した」と思い、他の聖者の教えを請いに行くことなど無いはずですよ。

こう書いたとしても、上祐さんは、やはりカール・リンポチェ師の言葉が気になるかもしれません。でも私は、チベットの高僧のことを盲信することは辞めました。これはあまり知られていないことですが、チベット仏教のラマ・カルマバ(カルマ派の総帥で、観音様の化身といわれる)というお坊さんは、あの和尚ラジニーンのことを、「世界教主であり、神性の化身であり、生きている仏陀だ(当時)」といっています(詳しくは「マイトレーヤ」瞑想社刊を参照のこと)。これを読んで私は、チベット人にも色々な人がいて、みんな好き勝手なことを言っているんだなあ、と思ってしまいました。そう考えると、誰が仏陀かマイトレーヤかなどと騒ぎ立てることは、無意味だとも思います。

そろそろページがなくなってきたので、続きは次回に書かせていただきます。

だけど、それにしても上祐さんは、自分の体験した尊師について喋るといいながら、一番初めに他人の発言をもってくるとは、ちょっとおかしいですね。まあ、あなたの手紙を読んだところ、尊師のマハムドラーにかけられていて、言語の観念が崩れている真っ最中なのだそうですから、それも仕方がないことでしょう。とりあえず、おこころお察しいたします。合掌。

(次号につづく)

ペンネーム「証智の子」

## 上祐史裕さんへの手紙 (前編)



### 前略

上祐さん、いやマイトレーヤ正大師どのといった方がいいでしょうか。はじめまして。私はオウムの出家信者だった者です。あなたは、無名のいちサマナであつた私のことなど、つゆほどもご存じないと思います。ただ私自身は、オウムに入信した翌日に行われた、尊師のシークレットヨーガのあとで、あなたに修行法の伝授をもらった記憶があります。そのときは「こんなステージの高い方法の伝授をしてもらった記憶があります。そのときは「こんなステージの高い方法の伝授をもらって、なんてラッキーなんだ」と感動してしまいました。それは直接会えるなんて、なんてラッキーなんだ」と感動してしまいました。それはたったの数分のことでしたが、今となっては懐かしい思い出です。

さて、今回の手紙は、こんな思い出話に時間をついやすために書いているわけではありません。じつは、去る1998年に、「創」というややマイナーな月刊誌に、あなたと荒木広報副部長さんとの手紙のやりとりが載っていました。元信者だった者として、たいへんに興味深く読ませていただきました。ただ、いくつか考えさせられる所がありましたので、質問を兼ねて、こうしてペンをとらせていただきます。

上祐さんと荒木さんの対話は、4つのテーマに別れていました。それは、「一連の事件に対しどう思うか」、「脱会した高弟の方々についてどう思うか」、「尊師とは何なのか」そして「将来(予言)について」でした。ただ、紙面の都合もあるもので、事件のことと、尊師のことについてだけ、私が感じたことをいくつか書かせていただきます。

### 1「事件について」

まず私が残念に思ったのは、上祐さんがこの事に関して、オウムがなした一連の事件に対して、けっきょく口をつぐんでしまったことでした。たしかにあなたがいうように、自分が直接関与していないことは、裁判所の判断に委ねるしか仕方ありません。しかし上祐ご自身さんは、国土法違反の事件や、ポツリヌス菌や炭素菌散布事件などの当事者であつたはずで、これらの事件に関しては、あなたと一緒にワークしてきた方たちが、デッチあげでもなんでもなく、すべて事実であつたと認めています。他人のことはいいとしても、いったいどうしてそれらのことについては喋ってくれないのでしょうか。あなた自身が真実を語らずして、どうして「マスコミがでたらめなことを書いている」などという権利があるのでしょうか。

「それはタントラだから喋れないのだ」というのであれば、ちょっと悲しくなります。今現在、これらの事件の「実態」と呼ばれるものが、世間に暴露されてしまった以上、もはやそれを隠していても無意味なはずで、それどころかむしろ、このままあなたが、行ったこれらの事件に対して口を開かせば、ますます真実はうやむやになり、「あれはただの大量無差別殺人だった」、などといわれても当然のことでしょう。つまり上祐さん自身が、自分の経験を正確に公開しない

ことによって、マスコミが誤ったデータを流すのを容認し、結果的に衆生に真理を否定するカルマをつくらせているのです。そしてこのことに関しては、ポツリヌス菌散布事件に携わった、アッサージ、ウルヴェーラ等の、残存する正悟師の方々も同罪といえましょう。

だから幹部の方たちは、自分たちがなしてきたことを、あらいざらい話したうえで、「それでもみんなはオウムに帰依しますか」と信者の方に問い直す勇気が必要だと思います。あなたたちがそれらの犯罪行為によって、心を成熟させ、解脱や悟りを得ることが出来たというならば、自己の体験を交えて誠実に話せば、決して信者がオウムを離れていくことはないでしょう。ナローパやミラレバの受けたあの理不尽な試練が、包み隠さず公開されているぐらいなので、タントラだから喋ってはいけないとはいいい切れません。そして、それしきのことができないようでは、「自分たちの都合いい情報だけを教え込み、信者をマインドコントロールしている」といわれても、仕方がないことです。

### 2「尊師、そして教義のことについて」

次に、尊師のこと、そしてこれに関連して、教義のことについていくつか書かせていただきます。あなたは手紙の中で、世間の人達はオウムのことを、インチキ宗教だという、誤った先入観でしかとらえていない、とおっしゃられています。元サマナの私としても、これについては同じ思いがあります。尊師の超能力は嘘だった、瞑想体験は嘘だった、などろくに調べもせずにいけるのは、暴言もいいところです。

ただ、だからといって、尊師が正しいグルなのか、オウムが正しい仏教団体なのか、解脱に導く正しい教義や修行法を有しているのかは、全くの別問題です。オウムの教義や修行法が、ある程度は効果があつたけれども、正しい仏教とは根本的に違う教えであり、究極的な解脱に至らしめない、中途半端で不完全なものだと気づいたから、多くの者がオウムをやめていったのです。オウムの教義の不完全性や非仏教性については、仏典をもとにいくらでも証明できますが、とりあえずあなたが手紙の中で述べていたことだけについて、述べさせていただきます。それではあなたの手紙の順序どおり、話を進めてみましょう。

### 3 各国の聖者方について

まず、各国の聖者方が尊師のことを称賛していた、という点ですが、実は彼の発言には大きな問題が隠されています。それを以下に述べてみましょう。

たとえばカール・リンポチェ師は、尊師のことを仏陀だといったそうですが、なぜ彼は仏陀に説法することが出来たのでしょうか。尊師のことを、自分より劣る、程度の低い仏陀だと考えていたのでしょうか。そう考えると、もしかしたら、スーパー仏陀であられるリンポチェの率いるカギユ派には、尊師程度の仏陀ならゴロゴロ転がっているのかもしれない。

けど、オウムでは、仏陀(真理勝者)は世界に一人しかあらわれない、といっています。オウムという仏陀と、カギユ派の仏陀の定義が違うのでしょうか。彼がどういう理由で尊師のことを仏陀といったのかということを含めて、オウムの人は、彼の発言について、より厳密に検討する必要があります。

次に、アーナンダ・マイトリー高弟はどうでしょうか。

よくオウムの人は、「彼は阿羅漢だから、彼の発言には間違いがないはずだ」、